Ⅲ－１　小学部の実践

Ⅲ－１　小学部の実践

１.はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

２.低学年の実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

３.高学年の実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

４.地域資源を活用した実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

５.まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

Ⅲ－１　小学部の実践

１．はじめに

小学部は学齢期の出発点であり、キャリア発達の土台作りとなる重要な時期であるといわれている。また、家庭から離れて初めて学校という社会に触れる低学年から、中学部への移行も考えていきたい高学年まで幅がある。

本校小学部では小学部の６年間を低学年（１～３年）と高学年（４～６年）に区切り、大切にしたいこと、目指す児童の姿を以下のようにとらえて、学習活動を行った。

低学年で、好きなことや得意なことをたくさん見つけ、意欲的・主体的に取り組んで、充実感や達成感を充分に感じることは、将来的に余暇を楽しむことや、仕事にやりがいを見いだし前向きに取り組むことにつながっていくのではないかと考えられる。そこで、児童の好きなことや興味を持っていることを大切にしながら、活動をやりきる中で「やった」「できた」という充実感・達成感を味わってほしいと考え、低学年で目指す姿を**「自分の好きなことや得意なことを見つけ、楽しく主体的に活動する児童」**とした。

高学年で、学校や家庭の中で役割を持ち、役割を果たした時に感謝され、「役に立った」という喜びを持つことは中学部・高等部での作業学習や将来働く時の土台となると考えられる。そこで、自分の役割を知り最後まで取り組むことや、自分のしたことで人の役に立つ経験をして「喜んでもらえたから、またしよう」という気持ちを育てることが大切であると考え、高学年で目指す姿を**「自分の役割を知り、その役割を主体的に果たそうとする児童」**とした。

児童のこのような姿を目指して以下のことを大事にしながら授業づくりに取り組んだ。

① 好きなことや得意なことを見つけられる環境設定や支援
② 主体的に取り組むための支援と活動内容の設定
③ 人と関わりをひろげるための教師の支援
④ 役割を果たせるような場面や機会の設定

以上のことを踏まえて、今年度取り組んだ授業実践の中から、次の３つの授業実践を紹介する。

１つめは、低学年の遊びの指導「シャボン玉あそびをしよう」である。児童が興味をもった遊びを学習活動の中に取り入れて、自分の好きなことや得意なことを見つけ、楽しく主体的に活動するための環境設定や教師の支援のありかたについて考えた実践である。２つめは、高学年で行った生活単元学習「お店やさんをしよう」である。自分の役割を自覚して役割を果たすことや人に喜んでもらう体験ができるような環境設定・活動内容を考えた実践である。３つめは、小学部全体で行った「ポンポンダンスをしよう」である。外部の人と触れ合う経験を持ったり児童が生き生きとダンスに取り組んだりする中で達成感・充実感を感じられるようにと考えた実践である。

これらの実践を上述の４つの観点から児童の変容をもとに考察していく。

２．低学年の実践　～遊びの指導「シャボン玉遊びをしよう」～

（１）目的

小学部では、遊びの指導の時間は、自由遊びを中心に行っている。子どもたちは、なかよし広場でブランコやアスレッチックなどで遊んだり教室で見立て遊びをしたり思い思いに活動している。教師は、子どもたちが楽しめそうな遊具を用意し興味が持てるように声かけを行うなどしている。

入学当初、新生活が始まったばかりの１年生、新しい友だちを迎えた２年生と、それぞれの児童が生活の変化にとまどっていた。教師も児童同士もお互いがわからず、どのようにかかわればよいか、どんな遊びが好きなのか、手探りの状態であった。そのような中、C 子がシャボン玉の道具を偶然みつけて「したい」と伝えてきた。C 子が作ったシャボン玉が飛んでいる様子を見て、シャボン玉の道具を取りに来る子、少し離れて見ている子と、どの子も興味を持っている様子が伺えた。今まで遊びの時間に何をしたらよいかわからない様子だった A 子や B 子も「したい」と伝えてくる。そこで、児童が自分の好きな遊びを楽しむことで、主体的に活動できるように自由遊びの場面における環境設定と教師の支援のあり方について検討することにした。

（２）方法

自由遊びの場面の中で、シャボン玉遊びをしている場面に焦点を当て、児童の変容を追っていくことにした。期間は平成２６年４月～７月とした。

（３）実践

この実践では、平成２６年４月～７月における６名の児童のシャボン玉遊びの様子からシャボン玉遊びを広げるための環境設定と教師の支援について取り上げて紹介する。

① 児童の実態

本校小学部は複式学級であり、１組は１年生 A 子、B 子、C 子の３名、２年生 D 子、E 男、F 男の３名の６名で構成されている。４名は自閉症、２名は手指や体の動かし方があまり上手ではなく、安全面で配慮の必要な児童である。

表Ⅲ－１－１　１組児童の実態

		遊び	コミュニケーション
１年	A 子	なかなか遊びに集中できず、少し遊んでは次々とおもちゃを出していく、まわりに気を取られて気になった方へ移動していく。	「（さんぽ）あっぽ」など不明瞭ではあるが、言おうとする様子が見られる。
	B 子	教師の近くにいて、自分からなかなか遊ぼうとしない。教師が誘っても「いやー」と言う。	教師を「あー、あー」と呼ぶ、「いや」などと言って教師の反応を楽しむなど、教師と関わりたい様子が見られる。

	C子	ブランコやすべり台など体を動かして遊ぶのが大好きである。興味があるものをみつけて自分で工夫して遊ぶことができる	単語や「ブランコしたいの」などと自分のしたいことを自分から伝えることもある。
2年	D子	パソコンやDVDが好きである。誘うとブランコなどもすることもある。	「○○先生、ブランコするのー」と一緒にしたいことを伝えることもある。
	E男	ブランコやすべり台など体を動かして遊ぶのが大好きである。	伝えたいことがあるときには、教師の手を引いて連れて行く。促されると、「ブランコ、押して」など言うようになった。
	F男	ブランコやすべり台など体を動かして遊ぶのが大好きである。さんぽなどゆったりと過ごすのも好きである。	自分からはなかなか伝えようとはしない。促されると、「(押して) ～て」など語尾を言う。

② シャボン玉遊びを広げるための環境設定

ア. 道具の用意

(ア) パタパタタイプ

手に持ってパタパタと振るだけで、たくさんのシャボン玉ができる。手指を使っての操作があまり上手ではない子やストローで吹けない子に向いていると考えた。

(イ) 大きなシャボン玉が作れる輪

大きなシャボン玉は作るのが難しいので、何度も挑戦する楽しみ、できたときの達成感が味わえると考えた。子どもたちはすぐに気に入り取り合いになったのだが、交換して遊んでほしいと考え、1つ増やして2つ用意することにした。

(ウ) ストロータイプ

一人でじっくりと遊べるように、ストローとシャボン液を入れて持ち運べる容器を用意した。ストローはたくさん用意し、一度使ったら足元に置いてあるカゴに入れて、次にするときは新しいストローを使うということを児童にわかりやすく示した。

イ. 思い切りできる場所を用意

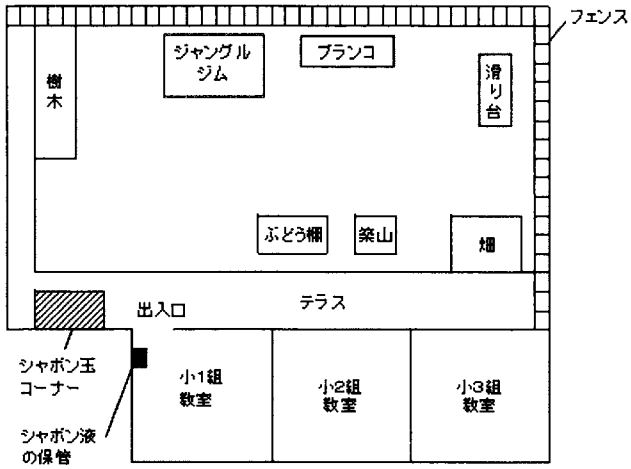
教室から外に出てすぐのテラスにシャボン玉コーナーを設置した。ここに行けばシャボン玉ができるとわかるようにした。屋根があり少しの雨なら当たらずシャボン玉遊びができる。暑くなってからはテントを張り日差しを遮るようにした。

ウ. 粘性の強いシャボン液を用意

大きなシャボン玉がなかなかつくれないことが続いた。シャボン液が水っぽくて膜ができないからではないかと考え、いろいろなシャボン液を試したところ、粘性の強い液がっくりやすいことがわかり、これを使用することにした。

エ．大人がシャボン液を用意

子どもたちは、シャボン液を必要以上に使いすぎたり全て流してしまったりすることがあったので、大人が器に入れることにした。児童の手が届かないところに保管しておき、子どもたちから“シャボン液がほしい”ということを伝えてくることも促していきたいと考えた。



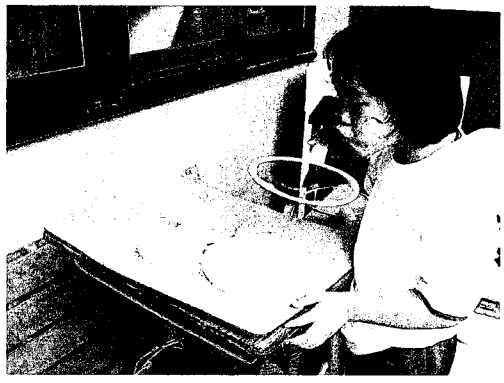
図Ⅲ－２－１なかよし広場とテラスの配置

なかよし広場とテラス

③ 教師の支援

ア．「自分もやってみたい」という思いをかなえるための技能的な支援

A 子は、みんなが楽しそうに大きなシャボン玉を作っている様子を見ながら、何度も取り組んでいたが、なかなか作れなかった。教師が手を持って補助するとできるが、一人ではなかなかうまく作れない。一人で作りたいという A 子の気持ちを大切にし、どのように支援したら、一人で作れるようになるかと考えた。A 子の様子をよく見てみると、シャボン液に輪を少しだけつけていたり、輪を手と平行にしてすばやく動かしてしまったりなどしていて、大きなシャボン玉を作る時の手の動かし方がうまくできていなかった。手の動かし方をイメージできるようなことばかけをすれば自分一人でも手をうまく動かせるようになるのではないかと考えた。シャボン液をしっかりと輪に行き渡らせ膜を張る動作の時には「ギューッと押しつけるよ」、できた膜を飛ばす動作のときには「ゆっくりフワ～って大きく動かすよ」など、声かけと共に教師が手を添えて一緒にした。少しずつ手を添えての支援を減らし、声かけだけするようにした。A 子からも、その動作をするときに「ギューッ」「うわー（フワ～っ）」などの発話が見られた。何度も取り組んで、７月頃には一人で大きなシャボン玉を作れるようになった。



イ．遊びを広げるための支援

（ア）友だちがしているからやってみたい

２年生のＤ子は、手が汚れるのが苦手でDVD鑑賞やパソコンをすることが好きである。入学してきた１年生が好きになり、１年生に関わりたいような様子が見られはじめていたが、上手に関わることができないでいた。シャボン玉遊びも少し離れたところから見ていた。環境の変化に適応するのが難しい児童なので今は新しくなったクラスに慣れることに精一杯なのだろうと推察した。そこで、しばらくの間は無理に誘わないでみんなが楽しそうに活動している様子を見てもらうことを大切にしようと考えた。Ｄ子が座って見ることができるように椅子を用意し、「みんな外で遊んでるよー、Ｄちゃんもブランコする？」など様子を見ながら声をかけた。

毎日、少しの時間だがＤ子は友だちがシャボン玉をしている様子を見ていた。そして、約１週間後に自分からストロー型を吹こうとした。うまく吹けなかったので、Ｄ子の口をしっかり閉じるように口元に手を添えた。すると、少しシャボン玉が出た。「すごいね、できたね」と言うと、Ｄ子は笑顔ではなかったが「うん」と答えた。翌日、自分からやって来て一人で吹いている姿が見られた。

（イ）草にシャボン玉をくっつけてみよう

５月下旬、Ｆ男が一人でストローを持って歩きながらシャボン玉を吹いていた。雨上がりでなかよし広場の草が濡れていた。Ｆ男はしゃがんで吹いている。何をしているのかとよく見てみると、濡れた草に向かってシャボン玉を吹きつけていた。さらによく見てみると、草についているシャボン玉が割れないで吹きつけられるごとに増えていた。「すごーい!!」教師が声をあげて驚き、Ｆ男の横で同じように吹きつけながら「Ｆちゃん、すごいね、楽しいね」と伝えたところ、Ｆ男は吹くのを休んで、教師の目を見た。そして「フッ」と息を吹いた。「シャボン玉を地面に吹きつけて欲しいということを伝えているのかな」と考え、教師がシャボン玉を地面に吹きつけた。そしてＦ男はそのシャボン玉を見つめた。そのやりとりが数回続き、その後Ｆ男はまた自分でシャボン玉を地面に吹きつけはじめた。

濡れた草にシャボン玉を吹きつけるＦ男

（ウ）シャボン玉を流してみよう

６月上旬、水が大好きなＦ男は、手洗い場で蛇口をひねって水を出し流れてくる水に向かってストローでシャボン玉を吹きつけて遊んでいた。シャボン玉が水に流されていく様子をじっくりと見ていた。

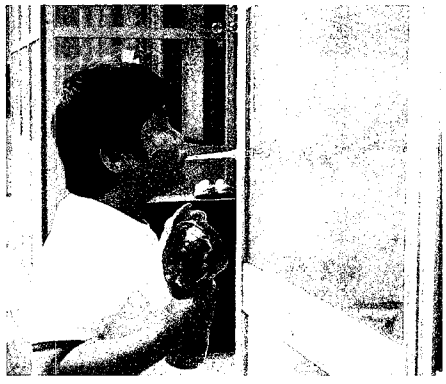
シャボン玉が水に流されていく様子は大人が見ても面白いと感じるものであった。Ｆ男は自分から発信することがあまりなく、一緒に遊ぶという様子もあまり見られない。この流れるシャボン玉で一緒に楽しめる方法はないか、じょうろで水を流してみたらそこにもシャボン玉を吹きつけてみたくなるのではないかと考えた。教師がじょうろで水をまいて

流れる水に向かってシャボン玉を吹くＦ男

誘ってみると、そこにもストローでシャボン玉を吹きつけてじっくりと見ていた。シャボン玉が水に流されていくと「もっと水をまいて」というように教師を見た。再度、じょうろで水をまくと、そこに向かってまたストローでシャボン玉を吹きつけ、流されていく様子をじっくりと見ていた。何度か繰り返し行うと、F 男は教師の持っているじょうろを手に取り、自分でじょうろの水をまき、流れる水に向かってシャボン玉を吹き始めた。

（エ）シャボン玉を壁にくっつけてみよう

６月上旬、霧吹きを気に入り、壁やアスファルト、自分の手などに吹きかけて遊ぶ姿が見られるようになった。霧吹きもシャボン玉遊びと繋がるのではないかと F 男の様子を見ていたが、なかなか繋がる様子はなかった。そこで F 男が霧吹きをしているところに、教師がシャボン玉を吹いてみたらどうなるかなと考えやってみた。F 男が霧吹きを吹きかけたところに、教師がストローでシャボン玉を吹きかけると、そこにシャボン玉がくっついた。その様子を F 男はじっくりと見ていた。「もっとシャボン玉を吹いて」と言うように、教師を見て「フッ」と息を吹いた。再度、教師がシャボン玉を壁に吹きかけると、うまくつかなかった。今度は教師が F 男を見て「シュッシュッして」と伝えると、F 男は壁に霧吹きを吹きかけてくれた。教師がシャボン玉を吹きかけると、そこにくっついた。そのくっついたシャボン玉を F 男はじっくりと見ていた。F 男はこの遊びを気に入って自分でするだろうかと、見守ることにした。すると、F 男は自分で霧吹きとシャボン玉を持ってきて、壁に霧吹きを吹きかけたあと、シャボン玉を吹きかけて、そこにくっつくシャボン玉をじっくりと見て遊ぶ様子が見られた。何度も繰り返し、交互に吹きかけて遊ぶようになった。



霧吹きを持ってシャボン玉を吹きつける F 男

ウ．他の児童との関わりを生み出す支援

（ア）C 子と F 男の道具の取り合いと A 子も交えての道具の交換

５月中旬、F 男は C 子がしている大きな輪のシャボン玉をしてみたそうな様子が見られた。C 子の様子をじーっと見ていて、C 子がちょっと手を離して置いた隙に F 男がさっと取った。それをさっと C 子が取り返してシャボン玉を作っていると、やはり F 男もしたくて、C 子の手から奪おうとした。二人からしたい気持ちがとても感じられた。どうしたら、交代で使ったり待ったりできるだろうかと考え、「C ちゃんは、今、し始めたばかりだから、ちょっと待ってあげよう」と声をかけた。「これはどう？」と違う道具で楽しそうにシャボン玉を作って見せて誘い、“これもおもしろそう、やってみたいな”と思ってもらおうと考えた。しかし、二人とも大きな輪に対する思いが強く、譲り合うことはできなかった。そこで、同じ場で遊んでいた A 子に同様の声かけをした。

友だちが使っている時には、「貸して」と言って待つ必要があることを繰り返し伝えた。一緒に、「～ちゃん」と呼びかけ「貸して」と言うようにした。待つときには、「C ちゃん、大きなシャボン玉を作るのが上手だね」と相手を見るような声かけをし、「早く A ちゃんもしたいね」と待っている児童の気持ちを代弁するようにした。「次、できるよ」「C ちゃん、代わってくれるかな」

と「待っていたら、できるよ」ということを伝えた。A子は、そのことばを受けて待つことができた。C子、F男も、繰り返し伝えていくうちに、違う道具やブランコなど違う遊びをして待つことができるようになってきた。C子やF男はある程度の時間続けて遊び、満足し納得しないと交代できないということがわかってきたので、時間を見て声をかけるようにした。

（イ）C子とF男の遊びの共有

5月上旬頃、C子が大きな輪に膜を張り、そこへストローで小さなシャボン玉をたくさん吹きつけるという遊びをしていた。「Cちゃん、すごーい。おもしろいねー」と声をかけた。F男はその様子をチラッと見ていた。F男は自分から発信してくることは少ないが、まわりの様子をよく見ていることが多い。それ以降何回かF男を誘い教師と3人でこの遊びをした。C子とF男が大きな輪を持ち、それぞれが輪に膜を張った。そこに教師が小さなシャボン玉を吹きつけた。C子とF男は教師がシャボン玉を吹きつけるのを待って大きな輪をフワーっと動かしてシャボン玉を飛ばしていた。

6月上旬、教師がシャボン玉コーナーを見ると、C子とF男が二人で何かをしていた。C子が大きな輪に膜を張りF男の前に差し出した。そこへF男がストローで小さなシャボン玉をフーッとたくさん吹きつけた。C子はF男が吹きつけるのを待ってから大きな輪をゆっくりとフワーっと動かしてシャボン玉を飛ばしていた。

大きな輪にシャボン液で膜を張り
シャボン玉を吹きつけるC子

（ウ）C子の遊びの他児への広がり

6月下旬、C子と教師が砂遊びをしていた。C子がじょうろで水をくんできて、砂場を掘った穴に水を流し込んで池を作った。少し離れたところでシャボン玉をしていたF男に「Fちゃん、Cちゃんがこんなものを作ったよ。見て見て」と声をかけた。F男はそこに近づいて来て砂場に腹ばいになり、しばらく池の水面を見ていた。そのあと、持っていたストローでシャボン玉を水面に吹きかけた。水面にプカプカと浮いて揺らめくシャボン玉をじっくりと見て、さらに繰り返しシャボン玉を吹きかけていた。そして、その様子を見ていたC子もストローを取りに行き、F男の隣で池にシャボン玉を吹きつけていた。

穴に水を注ぐC子と
池に向かってシャボン玉を吹くF男

並んでシャボン玉を吹くF男とC子

手にシャボン液をつけ吹くＣ子

Ｃ子の真似をしてやってみようとするＡ子

（エ）Ｂ子の友だちへの意識の変化

入学当初、Ｂ子は大人にくっついて何となく過ごしていることが多かった。「積み木しよう、お絵かきしよう」などと誘っても「いやー」と言ってなかなかしたいことが見つからない様子であった。まだ他の児童のこともわからないからか友だちの様子も離れて見ていることが多かった。またＣ子がパニックになっている様子を見てこわがり、教師にしがみついて動けなくなることがあった。その都度、教師はＢ子にＣ子がパニックになった理由をＢ子にわかるように繰り返し伝えた。するとＢ子は、Ｃ子がシャボン玉をしているのを見て、そばに行って一緒にするようになった。ある日、シャボン液の入っているトレイが遊び過ぎて泡だらけになってしまった。これを見てＡ子が「しゃーんま（シャボン玉)」、「あーあーあー（あわわ)」と言った。これを聞いてＢ子は「せんせー、あわわ」と真似をして言った。また、あまり走るのが得意ではないＢ子が、Ｃ子を真似てうちわ型をパタパタと振りながらテラスを走っていた。シャボン玉が飛んでいく様子を見てＣ子が「まってー」と言うと、Ｂ子も真似して「まってー」と言うようになった。

Ｂ子は友だちを意識するようになり、友だちの名前を覚え、「みー」や「まー」など頭文字で呼ぶようになった。さらに、その頭文字も読めるようになり、そこから文字への興味が広がり、あ、か、こ、す、た、て、と、の、ま、なども読めるようになった。おやつや給食なども友だちを意識し、友だちと一緒な場面では好きではないと思われるものも食べることが増えてきている。家庭では、学校での様子を自分から友たちの頭文字とジェスチュアで伝えるようになった。

エ．子どもの発話の意図を読み取ろうとする教師の姿勢

（ア）遊びをやめたくない、もっとしていたい

C 子は遊ぶのが大好きで、遊び方を知っているのか、考え出すのか、教師の予想外のことを始めることがある。大きな輪にシャボン液で膜を張り、ストローで小さなシャボン玉を吹き付ける、手でシャボン液をこねて泡にし、手で輪を作ってフーッと吹くなど、楽しそうに遊ぶ姿が見られる。遊びが大好きなゆえに、ずっと遊んでいたいという思いがあるようである。

次の学習時間になったので、「C ちゃん、お勉強しよう」と誘うと、「ちがうの」と言い、まだ遊んでいたいと伝えてきた。そのことばからたくさん遊んだという満足感が得られていないのではないか、今、遊びをやめてしまうと、もうシャボン玉ができないと思ってしまうのではないかなどと推察した。そこで、たくさん遊べて楽しかったという満足感を味わえるように、続けて遊べる時間を 20 分程度取るようにした。また、1年生なのでまだ一日の生活の流れがイメージできないからだと考え、次にいつできるか、一日の予定を C 子にわかる範囲で伝えてみることにした。またあとで遊べることがわかってもらえるように、教室に入り、個別学習をしたらまた外へ出て遊ぶということを繰り返し行った。このとき、「お勉強したら、またあとで遊べるよ」「みんな教室に入ってお勉強してるよ、C ちゃんも行こう」などの声かけをした。後でまた遊べるということがわかってきたようで、何度か声をかけると、遊びをやめて教室に入って来るようになった。その後、少しずつ個別学習の時間を長くするようにしていった。

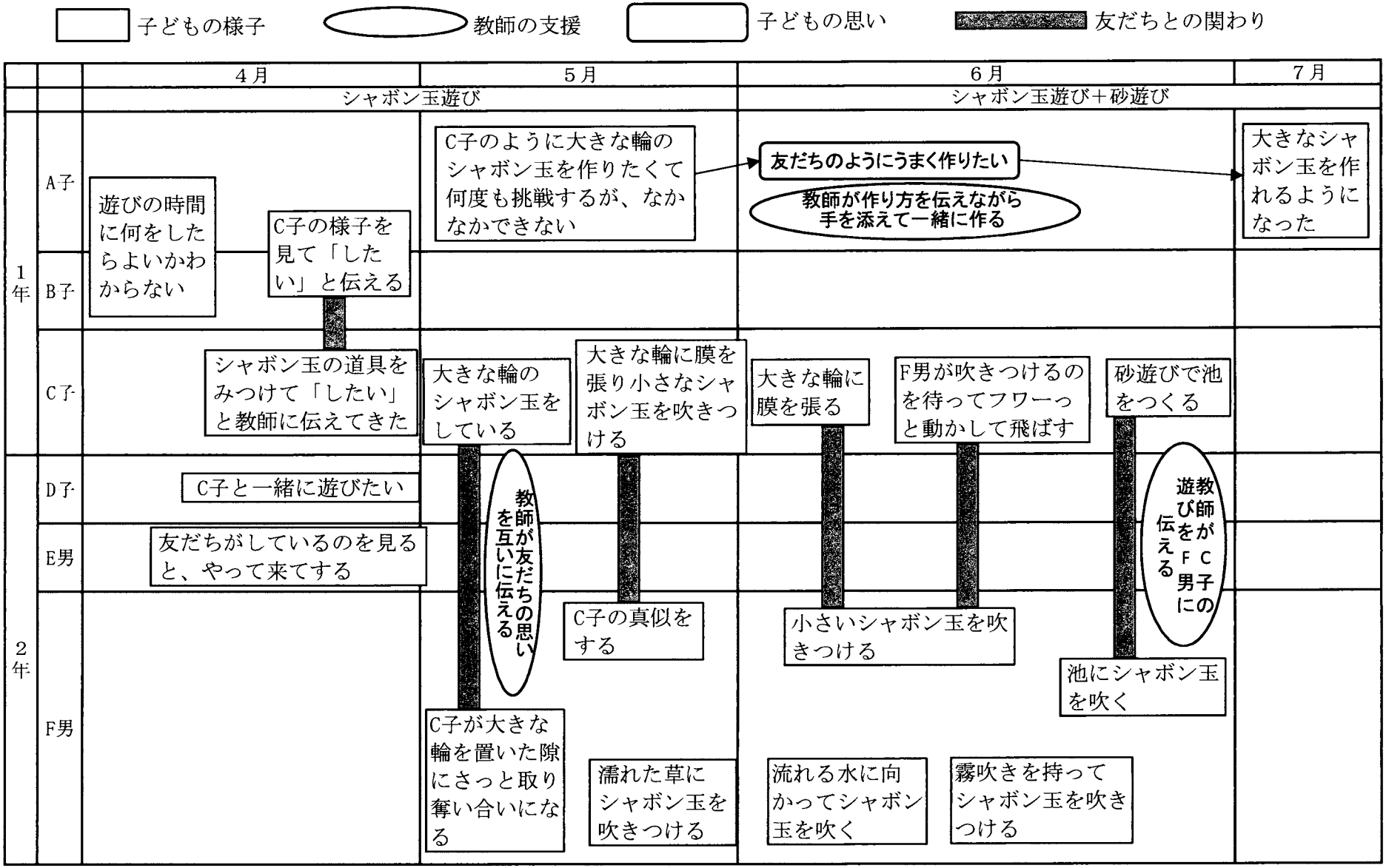
（イ）NO をうまく伝えられず、違うことばを発してしまう

シャボン液が足にかかってしまい教師のところに来て「くつ下」と言った。C 子は靴下にこだわりがある。すぐに靴下を替えてみようと思い、キレイな靴下を見せると「くつ下、ピンク」と言う。ピンクの靴下がはきたいのだとわかり、ピンクの靴下を見せると履き替えていた。

別の日に、シャボン玉をしているとき「運動会の練習をするよ、行こう」と声をかけると、「ちがうの」と言う。しばらくしてからもう一度、誘うと「ちがうのー、くつ下、ピンクー」と言いながら体当たりしてきた。ピンクの靴下を履いて気持ちを切り替えたいということだろうかと推察し、ピンクの靴下を見せると C 子は履き替えた。しかし、しばらくして「ちがうのー」とズックを脱いでピンクの靴下も脱いで投げた。大泣きしてパニックになってしまった。

他にも C 子の思いとは違うと思われる場面で「くつ下、ピンク、はきたいの」と言うことがあり、靴下を替えてみたがパニックになってしまうことがあった。もしかして、気持ちを切り替えたいとまでは考えておらず、ただ単に、それは嫌ですという NO の気持ちを伝えようとして出てくることばなのかもしれない、実際に靴下を履き替えたい訳ではないのではないかと考えた。遊びの途中で違う活動に誘ったときに「くつ下、ピンクー」と言ってくることがあったので、「～したくないの？わかったよ、じゃあ、シャボン玉しよう」と穏やかな口調で言うと、C 子は安心した表情でシャボン玉に向かっていった。

表Ⅲ－1－2　遊びの変化と児童の関わりの様子



（4）考察

児童は、シャボン玉遊びに興味を持ち、自分から道具を選んでシャボン玉遊びをしていた。そして、うまくできないときには何度もやってみる姿が見られた。私たち教師は、児童の「やってみたい」という気持ちを大切にし、児童をしっかりと観察し、どうしてできないのか、どうすればできるようになるかということを考え、その子に合った適切な支援をすることで児童の「できてうれしい」、「もっとやりたい」という気持ちを引き出せたと考える。また、教師同士で「この子はこんなふうにしたらできるようになった」、「こういう経緯で今はこんな状態である」などの児童の様子を細かく伝え合った。これが児童を理解し支援していく上で大切なことであると再認識した。

真似をするところから始まって自分で工夫をして遊べるようになったり、道具を取り合っていたのが、教師がそれぞれの児童の思いを伝えたことでお互い相手の思いがわかり一緒に遊ぶ姿が見られるようになったりした。同じ場で遊ぶだけではなく、相手の様子を見て相手に合わせて遊ぶというような関わりも見られた。どの児童も友だちの様子をよく見ているということがわかった。このことから友だちのようにやってみたい、友だちがしているから私もしてみたいという気持ちを推察することができた。児童は無意識にそのような気持ちを感じているのだが、教師はそれを意識できるようなことばかけや働きかけをすることによって、児童の中で、クラスの他の子という存在から友だちへと変わってきたのではないかと考えられる。

（5）まとめ

このシャボン玉遊びは自由遊びということで、「さあ、やろう」という無理な誘いではなく、「やってみる？」と尋ねたり「こんなのもあるよ」といった提案をしたりという姿勢をとることができた。教師の支援として大切にしてきたのは次のことである。

・教師自身が遊びを楽しみ、楽しそうな様子を児童に見せたこと
・児童がやってみたいと思う気持ちを大切にし、児童からの発信を待つようにしたこと
・児童の様子をしっかりと観察し、丁寧に児童の思いを読み取ろうとしたこと、そして、教師同士で児童の様子を伝え合ったり児童の思いの読み取りを確認し合ったりしたこと
・児童の思いに共感し、一緒に遊びを楽しんだり見守ったりしたこと
・「上手にできたね」「おもしろいね」など目線を合わせたりうれしそうな表情を見せたりしながらことばで伝えたこと

このような支援によって児童はさせられているのではなく、自分から「おもしろそう」と興味を持ち、「やってみたいな」と感じ、自分からシャボン玉コーナーにやって来るようになった。教師がいなくてもシャボン玉コーナーに行き、「シャボン液がほしい」と近くにいる教師に伝えにくるようになった。

また、児童の発することばや様子から、「私は○○ちゃんと遊びたい」「私は今、この道具で遊びたい」「○○ちゃんが大きな声で泣いたり怒ったりしている。よくわからないけど、こわいから近くにいたくないよ」などの思いが感じ取られた。他の子を意識しつつも、それぞれにシャボン玉遊びをしていた児童だったが、教師が友だちの遊んでいる様子を伝えたり友だちの気持ちを代弁したりすることで、児童同士をつなげていくことができた。

遊びを通して児童の気持ちを推察しながら、一人一人の児童と丁寧に関わっていった。児童の思いを受け止め、「今のは～の気持ちだったんだね、わかったよ」「そんなときは、こんなふうに言えばいいんだよ」と繰り返し伝えることによって、児童のコミュニケーション能力も向上していった。

３．高学年の実践　～生活単元学習「お店やさんをしよう！」～

（１） 目的

高学年（３組）は５年生のＧ男Ｈ男、６年生のＩ男Ｊ男Ｋ男の計５名で構成されている。３組として集団で活動する場面では、教師の支援を受けながらみんなでまとまって活動することができる。学級の係活動をしたり上級生としていろいろな場面で手伝いをしたり役割を分担したりする機会はあるが、自分に与えられた役割を理解して進んでそれを果たそうとする児童は少ない。また失敗したり負けたりすることを恐れて苦手なことに取り組もうとしない子もいる。

そこで高学年として「できる」体験を積み重ねて自信を持つことで自己肯定感を高め、自分の役割を理解してそれを果たすことで自己有用感を味わうなどキャリア発達につなげたいと考えた。

（２） 方法

３組の子どもたちはまだ全員で一つのものを作る経験をしたことがなかった。そこで全員で協力して大型の手作りおもちゃを作り、低学年の子どもたちに楽しんでもらい、それを２学期に行われる学習発表会の販売活動につなげていくことができればと考えた。

手作りおもちゃは低学年の子どもたちが好きなもので操作が簡単なもの、身近な材料を使ってできるものにしたいと考えた。またキャラクターが大好きな子や機械のしくみに興味のある子、紙工作の好きな子など３組の子どもたちの得意なことが生かせるものは何かと考え、ダンボールを使って大型の手作りガチャガチャを作ることにした。

（３） 実践

① 手作りガチャガチャを作って楽しもう

第一次　手作りガチャガチャの構造を考えよう
第二次　手作りガチャガチャを作ろう
第三次　手作りガチャガチャで遊ぼう

子どもたちのガチャガチャの経験は様々で、一度もしたことがない子や小さい時に数回したことがある子、大好きで何回も経験したことがある子など様々だった。そこでまず本物のガチャガチャを体験しに行くことにした。お金を入れダイヤルを回すと「ガチャ」とカプセルが出てくる。何が出たのかと楽しみにカプセルを開ける子、カプセルが出てきたことがうれしい子、どこから出てきたんだろうと不思議そうに機械をのぞきこんでいる子がいる中、全く興味を示さない子もいた。

本物のガチャガチャ体験

そこでそのしくみが目で見てわかるように一面を透明にした小型手作りガチャガチャを準備して子どもたちに提示した。ダイヤル代わりのペットボトルのふたを回すとカプセルが出てきて「すご～い」と子どもたちの声が聞こえてきた。その透明の部分をカプセルが転がって出てくる様子を見ると興味を持って覗き込んでいた。さっそく自分たちも作りたいと意欲を見せ、ガチャガチャ作りに取り組むことになった。その際組み立ての順番がわかりやすいように断面図を作ると、子どもたちがそれぞれ自分のできそうな部品を考えて選び、組み立てに取り組んだ。ガチャガチャの下の方の部品から順番に組み立てて、工作の得意なＪ男の番になると友だちの組み立てた部分をさらにきれいに仕上げてから自分の担当した部品をくっつけていた。Ｊ男が丁寧に仕上げている様子を他の子たちは興味を持って見ていた。Ｊ男の仕上

ガチャガチャの飾り付け

げが終わり、ガチャガチャが出来上がるとさっそく一人ずつカプセルを入れてダイヤルを回してみた。中でコトンと音がしてコロコロとカプセルが出てきて、みんな「やった～！」と大喜びだった。そこで「ダンボール箱のガチャガチャではどうかな？」と教師が問いかけると、Ｉ男・Ｋ男が「色紙を細かくちぎって段ボール箱に貼って飾り付けをしよう」と提案し、その提案に他の子たちも同意して一人が一面ずつ担当して貼ることになった。全員が一斉に好きな色紙をちぎり自分の担当した面を貼っていった。声を掛け合い、作業が遅い友だちの手伝いをして全員で協力してきれいな色合いの手作りガチャガチャが完成した。６年生のＫ男が**「ランランタイム**(小学部集会)**でしよう！」「みんなに見せてあげよう！」**と発言し、すぐに他の子どもたちも「そうだね！」と賛成したので、次回のランランタイム(小学部集会) で披露することにして準備にかかることにした。

ランランタイム当日、「僕たちが作ったガチャガチャです。みんなも楽しんでください。」とＪ男が挨拶してガチャガチャを見せると下級生全員が注目してくれた。カプセルの中身は３組全員で引換券を切って詰め、準備した「アンパンマンカップ引換券」である。ガチャガチャ担当のＧ男・Ｊ男はカプセルを補充していき、引き換え担当のＨ男・Ｋ男は４色の中から好きな色を聞いてアンパンマンカップを手渡した。カプセルが出てくると下級生の子たちはすぐに開けて次々とカップと引き換えていた。５年生のＧ男・Ｈ男はまだ自分の係りの仕事を理解して動くことは難しく教師の支援が必要だった。６年生のＪ男・Ｋ男は対応していたが次々とくる低学年の子に対応しきれないこともあった。それでも自分たちが作ったガチャガチャからカプセルが出てきたこと、そしてそれをみんなが喜んでくれたことに「楽しかった」「うれしい」と口々に感想を言い、達成感や充実感を味わっていた。そして活動の振り返りでＪ男・Ｋ男が**「学習発表会のバザーでしよう！」**と発言した。

ランランタイムで紹介

② お店やさんをしよう

第一次	お店やさんの計画を立てよう
第二次	お店やさんの準備をしよう
第三次	お店やさんを開こう

９月後半に教育実習生(以下教生と表記) ２名を迎えた。子どもたちの「学習発表会のバザーでガチャガチャをしたい」という願いを取り入れて学習発表会のお店やさんの練習をするために、生活単元学習の教生授業で「お店やさんをしよう」という単元を設定した。お店の名前はＪ男が「“ふしぎやさん”にしよう！」と提案し、みんなも賛成して『ふしぎやさん』が誕生した。そして教生の提案でもう一つの商品として色とりどりのスライムを作ったり、たまねぎ染めでおそろいのバンダナを作ったり、ダンボールの看板を作ったりしてお店の準備を整えた。また招待券を作って下級生や副校長先生、

『ふしぎやさん』

教頭先生に配った。店員としての挨拶のことばやお客さんとのやりとりのことばもみんなで考えて練習して当日を迎えた。

初めてのお店『ふしぎやさん』は大盛況で、それぞれ受付係、ガチャガチャ係、スライム係を担当して次々と来てくれたお客さんに対応したが、挨拶のことばがなかったり、説明できなかったりする場面もあった。振り返りでは子どもたちの表情は満足そうで「できた」「楽しかった」と口々に言っていた。そして**「次は学習発表会だね！」**と意欲を示した。

「スライムは何色がいいですか？」

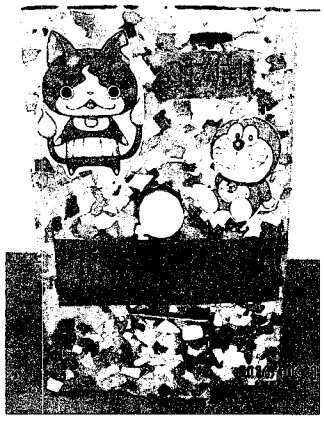
③ 学習発表会で「ふしぎやさん」をしよう

第一次	ガチャガチャ２号を作ろう
第二次	ポスターを作ろう
第三次	中学部に紹介しよう
第四次	スライムを作ろう
第五次	おみせやさんをしよう

ガチャガチャ２号の飾り付け

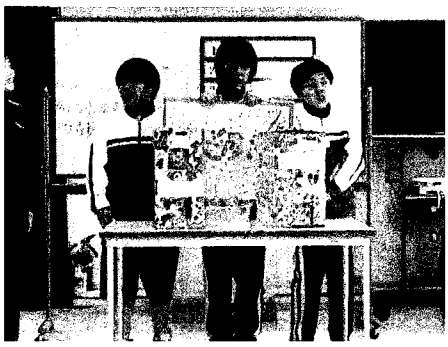
11月９日の学習発表会にむけて、５人が一人一役を担うためにガチャガチャ２号を作ることを提案した。２台目ということでみんな組み立て方を覚えていて、１号の時とは違った部品を選んで担当する子もいた。仕上げをしたのはＪ男で、細かいところまで丁寧に貼り付けていた。飾りつけになると「まだここ貼ってないよ」などと声を掛け合い、協力する姿も見られた。短時間ででき、仕上がりもきれいなものができあがった。ガチャガチャ２号を囲んで全員で記念撮影した時には肩を組み合って笑顔を見せていた。その時Ｊ男から**「３号も作ろう！」**と提案があった。**「これは女の子用で今度は男の子用にしよう！」**とのことである。計画にはなかったが、その発言に他の子どもたちも「そうだね。男の子用作ろう！」「３号作ろう！」とすぐに賛同した。２号を作り上げた達成感は次への意欲に確実につながっていた。学習発表会まであと10日あまりで時間的な余裕はなかったが、急遽計画を練り直してガチャガチャ３号を作ることにした。２台目よりもさらにてきぱきと作業をこなし、完成度の高いガチャガチャ３号を全員で作り上げた。

ガチャガチャ２号完成！



ガチャガチャ３号

また、Ｊ男は１学期からずっと「早く中学部になりたい」と中学部へのあこがれを持っていた。中学部１年生の先輩たちにも強い関心があって、自分から関わりを持ちたいと中学部の様子を見にいったり先輩に自分から話しかけたりしていた。そしてこの手作りガチャ

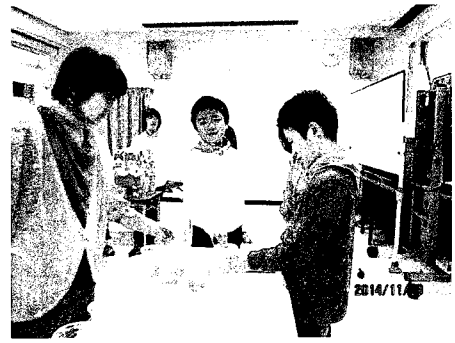


中学部ＨＴで紹介

ガチャのことを知らない彼らに見せてあげたいと言っていた。そこで中学部のみんなに小学部のことを知ってもらうよい機会になると考え、６年生３人でガチャガチャ１号２号を持って金曜日５限のハッピータイム（中学部部集会）に参加して中学部のみんなに紹介することになった。「３組で作った手作りガチャガチャです。」と実際に操作してカプセルを出して見せると、中学部のみんなから「すご～い」と感嘆の声があがった。「やりたい人いますか？」とＪ男が聞くとたくさんの生徒の手が挙がり、全員が試してみることになった。カプセルが出てきて喜んでいる生徒に「握手しよう！」とまたまたＪ男が提案し、中学部全員が試して全員と握手して、最後に「学習発表会で『ふしぎやさん』をします。来てください。」と宣伝して教室へと帰ってきた。

学習発表会の前々日に『ふしぎやさん』のリハーサルをした。その時に９月の初めての『ふしぎやさん』ではしっかりとできなかった挨拶のことばや説明のことばなどを確認して練習した。そして学習発表会当日には、９月の時とは見違えるほどしっかりと対応している子どもたちの姿があった。その日は家族だけでなく、職員や中学部・高等部の生徒、小学部の児童とたくさんのお客さんが次々と来店した。店員として実際のお金のやりとりをするのは初めての経験だったが、おつりの計算もしっかりとすることができていた。スライムコーナーに人がたくさんいる時には「ガチャガチャにも来てください」と子どもたち自らが呼び込みする姿も見られた。また９月の時には店員としての役割を理解できなかった５年生のＧ男・Ｈ男も役割を理解してお客さんに対応することができていた。用意したガチャガチャのカプセルもスライムもほぼ完売となり、片づけを終えた子どもたちは「ちゃんとおつりできたよ。」「楽しかった！」「スライムなくなった！」「ガチャガチャももうないよ！」と満足げな笑顔が見られた。**「もうこれでふしぎやさん廃業？」**とＪ男のさみしそうな声が聞こえた。

学習発表会ガチャガチャコーナー



学習発表会スライムコーナー

④ 大根の収穫と販売『だいこんやさん』

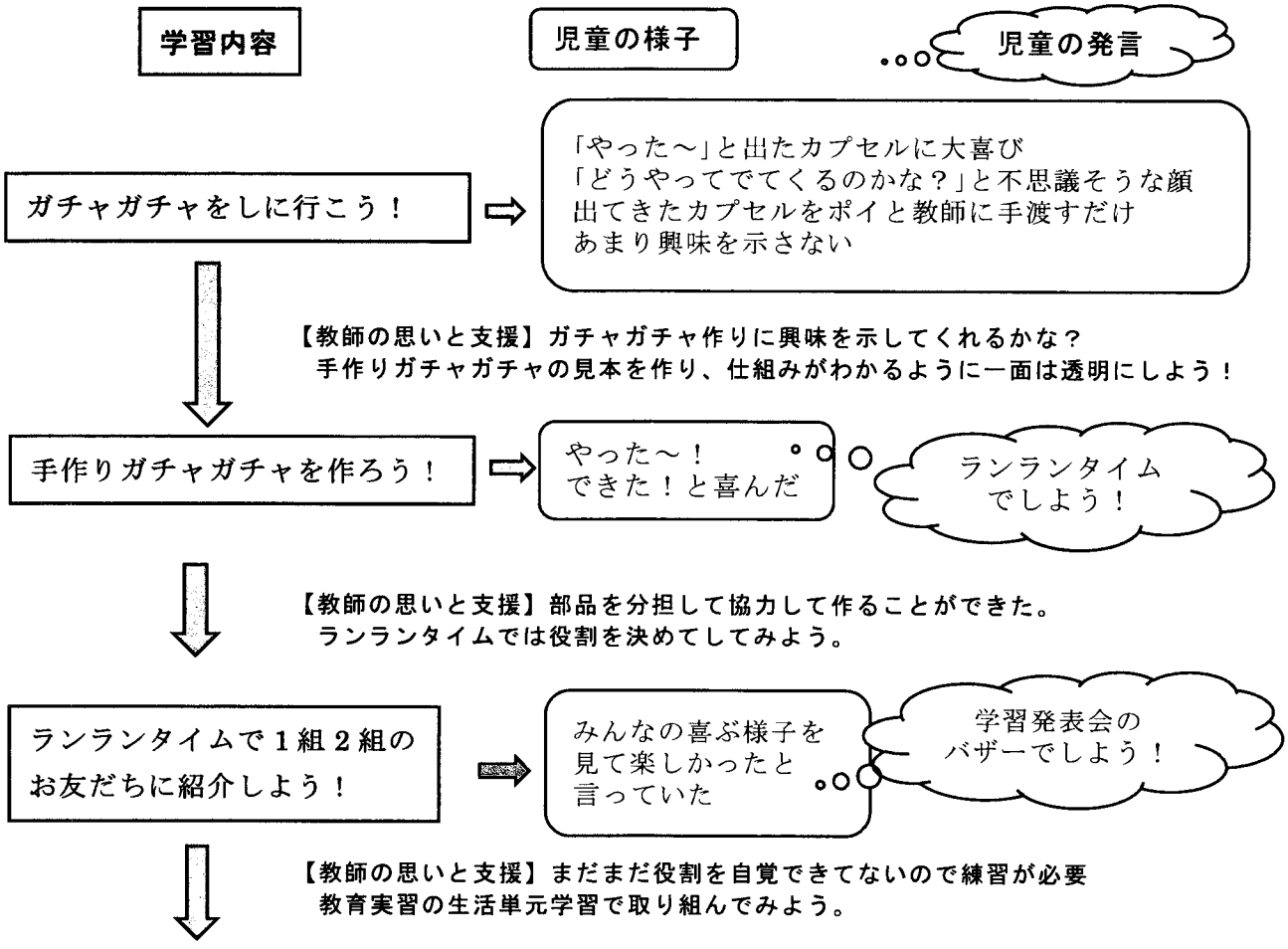
３組は『ふしぎやさん』の活動と並行して教室の前の畑で野菜を育てていた。学習発表会を終えた時ちょうどその畑で大根が収穫の時期を迎えていた。そこで、大根を収穫して販売し、その売り上げで次のガチャガチャのカプセルに入れる景品を用意して２月の教育研究会でもう一度『ふしぎやさん』をすることを提案した。もう「廃業か」とあきらめていた子どもたちは「またスライム作ろう！」「ガチャガチャしよう！」と次々に発言した。早速大根を９本収穫して昼休みに玄関で

大根の販売『だいこんやさん』

販売した。「玄関で小学部３組が作った大根を販売します。買いに来てください。」とＪ男が放送すると、次々と職員が買いにきてくれて 10 分足らずで完売し、２月に向けての資金を作ることができた。

（４）考察

当初は下級生も喜んでくれるような手作りのおもちゃを作り、それを使って学習発表会でお店やさんを開こうと考えた。そこで、思いついたのが手作りガチャガチャだったが、本物を体験しに行った時あまり興味を示さない子がいて、本当にこれでこの計画が実現できるのかと不安を抱えながら始めることとなった。そこでガチャガチャの仕組みを知ればおもしろさがわかると考え、一面が透明でその仕組みが見えるように工夫したガチャガチャの見本を作って提示した。それを見た子どもたちはガチャガチャの仕組みがわかり、自分たちでも作ることができると意欲を持つことにつながった。実際に作ってみると子どもたちの満足のいく手作りガチャガチャができあがったので、その達成感から他の人にも見せたい、体験してほしいと次への意欲につながっていった。さらに教生との授業で、自分たちでお店の準備をしたり客とのやり取りの仕方で大切なことを学んだりしたことで、自分の役割を自覚しお店やさんを楽しむことにつながったと考えられる。そのことで子どもたちは一層意欲的になり、ガチャガチャ２号だけでなく３号も作るなど、教師が意図した以上の展開がどんどん子どもたちの発言となって出てきて、活動は広がりを見せていくことにつながった。以下に学習内容とその時の児童の様子と次への学習につながる児童の発言、そしてそれに対する教師の思いと支援をまとめた。



学習発表会のお店やさんの練習をしよう！

『ふしぎやさん』にしよう！
おそろいのバンダナをつけて喜んだ。
スライム作りを楽しんだ。

次は学習発表会だね！

【教師の思いと支援】役割を少し自覚できたかな。一人一つ役割を持つために学習発表会までにガチャガチャをもうひとつ作ろう！

ガチャガチャ２号を作ろう！

やった～！
きれいにできたと喜んだ！

３号も作ろう！
今度は男の子用。

【教師の思い】２つ目は組み立て方を覚えていてスムーズにできたし完成度も高いね。３号も作るなんて予想もしてなかった。

ガチャガチャ３号を作ろう！

声をかけあう姿がよく見られ
早く完成させることができた。

３つそろったよ！

【教師の思い】子どもたちの意欲的な姿にはびっくりだね。３号の仕上がりは一番いいね！当日が楽しみ！

中学部に紹介しよう！

みんな～握手しよう！
中学部全員が体験してくれたことを喜んでいた。

みんな来てくれるかな？

【教師の思い】中学部のみんなが「すご～い」とびっくりしていた。６年生も得意げだったな。

学習発表会当日
『ふしぎやさん』

おつりを間違えずに渡していた。
ガチャガチャもスライムも
なくなって喜んでいた。

ふしぎやさんは廃業？

【教師の思い】９月の練習の時とは見違えるほど、みんなしっかりと役割を果たしていた。これで終わらせるのはもったいないな。

大根を収穫して販売しよう！

全部で 800 円の売り上げに
喜んでいた。

またスライム作る？
ガチャガチャは？

【教師の思い】これを資金に教育研究会で最後の「ふしぎやさん」をすることにしよう。

教育研究会で「ふしぎやさん」をしよう！

一つ一つの活動を展開するたびに、子どもたちは確実に「できた」体験を積み重ねて自信を持ち、役割を果たした達成感と充実感を味わい、次への意欲を見せてきた。また教師に言われて動いていた子が、自分の役割を理解し自覚してその役割を果たすようになってきた。そして、「人に喜んでもらう体験」をし、「人からすごいと思われる体験」をすることで、自己肯定感や自己有用感が高まってきた。特に学習発表会の日に家族がガチャガチャをしに来てくれたりスライムを買ってくれたりしたことや、家族の見ている前で大勢の人を相手に対応できたことが大きな自信につながったと考えられる。学習発表会が終わった時に「これで廃業？」とつぶやいたＪ男や、大根を収穫して販売した時に「またスライム作る？」「ガチャガチャは？」と質問したＩ男・Ｋ男の中に確実に「もっとしたい」という気持ちが育っていると考えられる。

「ふしぎやさん」開店中

（５）まとめ

今回の「お店やさんをしよう」では、教師が企画したことを提案することから始まった。それを受けて子どもたちは本物のガチャガチャを体験し、その構造を知って自分たちのガチャガチャを作った。そしてそれは子どもたちの満足する仕上がりになり、それをしたいと低学年の子どもたちが集まってくれ、中学部の先輩も喜んでくれ、教師たちからも「すごいね！」とほめられることとなった。その達成感から子どもたちはガチャガチャを３号まで作ったり、大根を販売して次の活動への資金作りをしたりするなど、次々とこの活動に意欲を見せ、教師が意図した以上の広がりを見せることとなった。そしてその中で協力し合う姿も見られるようになってきた。

これからも子どもたち自身で考えたり選んだりして活動内容を決め、自分たちで工夫したり協力し合ったりして活動を展開できるように、さらに主体性や自主性を育てキャリア発達の支援を行っていきたいと考えている。

４．地域の人的資源を活用した実践　体育科　～ポンポンダンスをしよう～

（１）目的

小学部は１組６人、２組５人、３組５人の 16 人で構成されている。外部の人との関わりについては、体験入学の保護者や学校見学で訪れた人など外部の人を目にする機会は多く、積極的に話しかける児童もいる。しかし、外部の人からの働きかけに応じることは少なく、直接評価される機会はほとんどない。本校で取り組んでいるキャリア発達支援の視点から、小学部段階においては「外部の人と一緒に活動を楽しむ」「外部の人からの評価を受ける経験をする」ということをねらいとしている。

（２）方法

音楽の授業でダンスを取り上げるととても楽しそうに踊る児童が多い。また、運動会で友情出演してくれた高校生のチアダンスを見て、その場で踊りだしたり、熱心に音楽を聴いたり、ダンスを見たりしている児童が多かったことなどから、外部講師を招いて、より楽しいダンスを教わることにした。そして、そのダンスを 11 月９日の「学習発表会」で小学部のステージ発表とすることにした。

（３）実践

ダンスは音楽の授業等で取り組んでいる。ダンスが始まると見本の教師を真似て積極的に踊る児童が多いが、中には音楽は聴くが集団の中に参加できない児童、まったく興味を示さない児童もいる。指導は外部講師が考えたダンスを児童に直接教えるもので６回行われた。小学部の職員は、外部講師の指導だけでは踊れない児童に対し、一緒に踊ったり、声かけをしたりなどの支援を行った。指導後は外部講師と振り返りを行い、児童の様子を伝えて話し合い、次時の改善につなげた。また、児童が意欲的に踊れるように、音楽の時間のダンスで積極的に手に取る児童が多かったポンポンを両手に持つこととした。ポンポンについては、多くの児童は積極的に手に取り踊っているが、中にはメッキテープのポンポンの感触が嫌で持ちたがらない児童、持っていられずすぐに離してしまう児童もいた。そこで、ポンポンの感触が嫌な児童のために、その児童の好きなウレタンの素材で作られたポンポンを用意したり、すぐ手から離してしまう児童のためにゴムをつけて手首につけられるようにしたりと、工夫・配慮をした。

ステージでの練習

ダンスは、基本となる動作を繰り返すものから始まった。児童のことを考えたわかりやすい振り付けで、すぐに真似て踊れるようになった児童もいた。基本のダンスがほぼ踊れるようになると、高学年の児童には曲の途中で下級生がくぐるためのアーチを作る役割が加わった。アーチは２つあり、６年生３人と５年生１人で作った。他の児童と違った動きをすることで、誰を見本として見て良いのか、戸惑う児童もいたが、実践を重ねることで、見通しを持ってできるようになっていった。さらに、ステージ練習が始まると、ステージのサイドに移動するフォーメーションの役割も加わった。

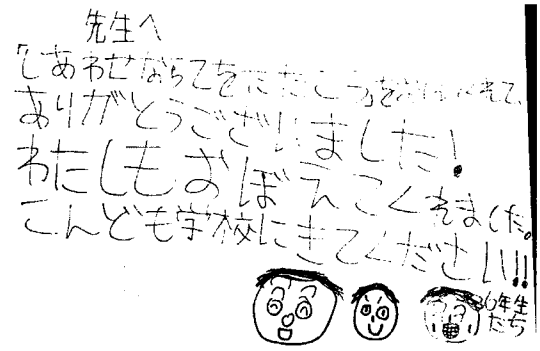
アーチの練習

学習発表会本番に向け、外部講師と衣装について話し合ったところ、子どもたちの意欲をより高めることが期待できると考え、外部講師がダンス教室で使用している衣装を借りることにした。その衣装を着けて練習したところ、児童の踊りたいという意欲がより高まった。また、本番直前の指導の後に外部講師から「手が大きく動いて元気よく踊れて、良かったね」「６年生はもっとこうした方がいいよ」などの評価を受けた。その外部講師からの評価が自信につながったのか、普段の音楽のダンスでは集団の中に入っていけない児童がステージ中央で踊っていたり、人が多いところで体を動かすことをためらいがちな児童が、思い切り体を動かして踊っていたりする姿が見られた。また、自分の役割を意識するようになり、アーチを作ったとき、早くアーチを解除したくて下級生に怒りながらせかしていた児童が、「こっちだよ」と優しく手招きする姿が見られた。

学習発表会でのアーチ

（４）考察

児童の発達段階に応じてダンスの中にアーチを取り入れたり、フォーメーションを取り入れたりなど違った動作を設定することは、それぞれが自分の役割を意識して動くことにつながったと思われる。学習発表会が終わった後、保護者や他学部の職員から「上手だったよ」「良かったよ」という評価を受けたことから、うまく踊れたという達成感や充実感を得ることができたと思われる。また、振り返りの授業で外部講師に手紙を書いた時、６年生の児童が自ら「ダンスが上手に踊れたこと」や「教えてくれてありがとう」という記述をした。このことから、達成感や充実感を味わったことで、感謝の気持ちを持つことができたのではないかと思われる。



６年生の書いた手紙

（５）まとめ

普段の様子から５年生の Ｈ 男にはアーチを作るのが難しいだろうと思っていたが、外部講師にアーチ役に指名され、役割をこなすＨ男を見て、普段接している教師は先入観にとらわれていることもあると気づくことができた。また、外部講師との授業を継続的に行ったことでそれぞれ個々に踊っていたダンスの内容が、アーチやフォーメーションなどいろいろな役割を取り入れたダンスも可能であることを学んだ。これらのことを今後の学習活動に生かしていきたい。

学習発表会

５．まとめ

小学部では、低学年は「自分の好きなことや得意なことを見つけ、楽しく主体的に活動する児童」、高学年は「自分の役割を知り、その役割を主体的に果たそうとする児童」になってほしいと願い、授業づくりに取り組んできた。

そのために必要なことについて次のことを共通理解し授業に取り組んだ。

① 好きなことや得意なことを見つけられる環境設定や教師の支援

② 主体的に取り組むための支援と活動内容の設定

③ 人との関わりを広げるための教師の支援

④ 自分の役割を知り、役割を果たせるような場面や機会の設定

さらに、授業の中での児童の変容を行動と内面の変化から捉え、授業の改善点を話し合い、次の授業につなげていくことで、小学部で願う児童の姿に近づくことができると考え授業づくりに取り組んだ。その取り組みを通してキャリア発達支援の視点で大切な学習活動について、上記の４つの視点から整理する。

（１） 好きなことや得意なことを見つけられる環境設定や教師の支援のありかた

自分の好きなことや得意なことを知ることは、自分の強み、自信につながる。そのことは、将来の働くことやよりよく主体的に生きることにつながると考えられる。

児童が自分で好きなこと、得意なことを見つけるためには、安心して活動に取り組むことが必要である。そのためには、まず教師が児童に肯定的に関わる姿勢を大切にすることである。その姿勢を大切にすることで、児童と教師の間で信頼関係が築かれ、児童は信頼できる教師のそばで安心して活動でき、好きなことや得意なことを見つけることができると考えられる。

そして、活動の中で、次の２点が特に必要であることを学んだ。

・児童が楽しんでいることや得意な様子で行っていることに対して、教師が一緒に楽しみ、その楽しい思いをことばやしぐさや表情で伝えていくこと

・児童が十分に活動を楽しむために、自ら努力して実行できる環境づくりを行うこと

低学年の実践では、次の例に示される。

遊びの時間に、児童の好きなシャボン玉遊びを学習活動に取り入れ、教師が工夫してシャボン玉を作っている友だちの様子をことばで伝えたり表情やしぐさで表現したりして他の児童に伝えた。そのことにより別々の場所でシャボン玉遊びをしていた児童が、友だちの近くに来て同じようにシャボン玉を作って楽しんだりするようになった。またうまくシャボン玉を作ることができなかった児童が、友だちのようにうまく作りたいという思いから何度も練習して作ることができるようになった。うまくシャボン玉が作られた時に、複数の教師から「上手にできたね」と褒められたことで自信につながり、さらに褒められたいという思いから、もう少し難しい作り方にも挑戦し努力してできるようになった。

児童は自信を持ってできることが増えることで自己肯定感を高め、次への意欲につながり、好きなことや得意なことを見つけていったと考えられる。

（２） 主体的に取り組むための支援と活動内容の設定

【「わかる」「できる」「やってみたい」と思える状況づくり】

児童が主体的に活動に取り組むためには、児童に「わかる」「できる」「やってみたい」と思え

る活動内容や状況づくりが必要となってくる。

高学年の実践では、最初に本物のガチャガチャを体験した後、教師の作った手作りガチャガチャで仕組みを学んだことで児童はガチャガチャに対する知識を更新した。そのことがわかる状況作りにつながり、実際に作る時には児童が役割分担しながら自ら考えて部品の組み立てを行うことができた。今まで体験したことのなかった児童も仕組みを知ったことで「やってみたい」という気持ちが芽生え意欲的に作ったことから、「わかる」「できる」「やってみたい」と思える状況づくりが自ら考えて行動できることに結びつくことを確認できた。

また、高学年では次のことも大切になると考えられる。

【目標を意識して活動できること】

児童が目標を意識できることは、主体的に活動することにつながる。

授業の中で目標を意識するために、授業の最初に児童自身が頑張りたいことを教師と一緒に決めて活動を行うことが望ましいが、小学部の高学年段階でも自分自身で目標を決めることができる児童はごくわずかである。多くの児童は、教師から提示された目標を意識して活動をおこなっていく。そのために教師はその児童がもう少しでできそうな活動内容を準備し、できた時に努力してできた過程を大いに褒めることが大切である。そのことで児童は充実感や達成感を味わい、それを繰り返し行っていくことで「次これをしたい」いう要求が生まれ、次の活動への意欲につながっていくと考えられる。

また目標を意識することが難しい児童には、発達段階に応じて見てわかる活動を準備し、主体的に活動する中で成功体験を積み重ね、できた喜びや達成感を味わえるようにすることが大切であると考えられる。そのことで自分が頑張ることを意識できるようになるのではないかと考えられる。

（３）人との関わりを広げるための教師の支援

人との関わりを広げることは、コミュニケーションする力を身につけることにつながる。コミュニケーションをする力は、特に小学部の低学年では、信頼できる人と安心した環境の中で関わることで身につくと考えられる。そして児童は、信頼できる教師に自分の思いや要求を伝えたいという気持ちが芽生え、伝わる方法を模索しながらなんとか伝えようとするようになる。

また複数の教師と関わり、身近な教師以外の教師ともコミュニケーションをしたり、友だちと関わり要求や思いを伝える経験をしたりすることが人との関わりを広げていくことにつながる。その際友だち同士の関わりでは、お互いの思いをうまく伝えられないことからトラブルになることがあるため、教師がその中に入り、お互いの思いをわかる方法で伝える役割を担う必要がある。さらに友だちとの関わりを広げるという点では、低学年の実践で、工夫しながらシャボン玉作りをしている友だちのシャボン玉の作り方に着目するように教師が示し、その時に「おもしろそうだね」などの共感のことばを伝えたりすることで、「自分もやってみたい」いう気持ちが芽生え、友だちの作っている様子を観察し真似をしてやってみるという姿が見られた。また、友だちがパニックを起こすので怖いという印象を持っている児童には、教師がその友だちの思いを推察して丁寧に伝えていくことで、その友だちに興味を示すようになり、同じ遊びを始めることがあった。

これらのことから、教師が友だちの遊びの楽しさを伝えたり、友だちの思いを推察して伝えたりする役割を果たすことで、その友だちに対する知識が更新され、友だちに関心を示して一緒に楽しく遊びたいという気持ちの芽生えにつながり、そのことが人との関わりを広げることにつな

がっていくと考えられる。

また、地域の人との関わりでは、外部講師に学習発表会で披露するダンスを習った。練習の回数を重ねるうちに、児童のほうから外部講師に近寄って話しかけたり、外部講師から質問されたことに嬉しそうに答えたりする姿が見られ、外部の人との関わりがコミュニケーションの力を伸ばす良い機会となることを学んだ。

（4） 役割を果たせるような場面や機会の設定

自分の役割を果たし、人から「ありがとう」と言われる経験をたくさん積むことは、キャリア発達にはとても大切なことであると考えられる。この時に大切なことは、教師が決めた役割を児童にさせるのではなく、児童と教師で話し合って決めた役割を行うことが、自分の役割を意識して果たそうとする意欲につながると考えられる。特に高学年は、中学部につなげるための学習活動として、「働く」意欲につながる感謝される経験、人の役に立つ経験を積むことが大切である。そのために役割を果たす場面や機会を設けることが必要になってくると考える。

高学年の実践の中で、小学部の児童を対象に店を開いた時には、それぞれの児童が、ガチャガチャの担当、受付の担当など役割分担をし、自分の役割を意識して客と関わった。その時に、多くの下級生や教師から「ありがとう」「うれしい」という言葉をかけられて、自分たちの行ったことが人から喜ばれたという経験を積んだことにより、充実感や達成感、自己有用感を味わった。そのことでさらに自分たちの役割を責任を持って果たそうとする意識を強く持ち、学習発表会のバザーでは、自信を持って客とのやり取りや品物の受け渡しなどを行うことができた。

自分の役割を意識し役割を果たせるような場面や機会の設定を行うことが、充実感や達成感、自己有用感につながることをこの実践から学んだ。

今年度の研究では、低学年と高学年のそれぞれの学習活動で上記の４つの点で大切なことを学ぶことができた。

今後の課題として、低学年、高学年の学習活動の系統性についての検討が必要となってくる。

また、高学年では、自分の役割を意識して役割を果たそうとすることの大切さを学んだが、低学年のことを考えてどんな店にするかという企画の段階では児童に考える機会を設けなかったので、教師が企画したことを児童が行うことになった。そこで、児童がより自分の役割を意識できるように、自分たちで企画できるような支援を考えていく必要がある。

さらに、自分で目標を設定したことに対して、他者評価を受けて自分を評価することは自分を知ることにつながり大切になってくると考えられるので、小学部段階での自己評価のあり方も検討していきたい。

【参考文献】

１．渡辺三枝子（2008）「キャリア教育」―自立していく子どもたち　東京書籍
２．菊地一文　（2013）実践キャリア教育の教科書　特別支援教育をキャリア発達の視点で捉えなおす　学研教育出版
３．湯浅恭正　（2011）発達障害児のキャリア形成と授業づくり・学級づくり　黎明書房
４．本校研究紀要　平成 24 年度